

椋山女学園大学

世界の秘密 - 解釈 / ことば / 表現 -

著者	北岡 崇
雑誌名	言語と表現 - 研究論集 -
号	1
ページ	17-24
発行年	2005-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00002992/

世界の秘密 — 解釈 / ことば / 表現 —

北岡 崇

- 1 世界は解釈されたものである。
- 2 解釈には、一般に受容されているものとして二種ある。
 - 2—1 身体による解釈。感覚的な世界はこれによって成立する。
 - 2—2 思考図式による解釈。この解釈を導く図式には三種ある。
 - 2—2—1 各科学の根底を成す仮設。例えば、アトムイズム、その他、同種の確信をもって前提される多くの仮設。
 - 2—2—2 もつとも普遍的な図式としての形式論理学。
 - 2—2—3 数学。
 - 3 身体ないし思考図式は、世界解釈の方法であり、世界成立の条件である。
- 3—1 世界は解釈者から独立した存在を持つという判断に十分な理由はない。
- 3—2 但し、世界は解釈者から独立した存在を持つというこの判断は常識的な判断である。
 - 3—2—1 この判断が常識的となっている背景にはそれなりの事情がある。事情とは、われわれはわれわれ自身に立ち現れてくる世界の存在に対するわれわれ自身の貢献・寄与・介入をほとんど意識しないということである。われわれはこの貢献・寄与・介入にときおり気付くことがあるが、これを考え抜くことは稀である。
- 3—2—2 世界の存在へのわれわれの貢献・寄与・介入が完全に解明されないかぎりわれわれは常識をもってではあるが、やはりその理由が不十分な判断に導かれ生活するしかない。
- 3—2—3 世界の存在へのわれわれの貢献・寄与・介入は、それに気付いていない者にとっては、秘密である。彼は秘密に気付いていないのであるから、彼にとってはこの秘密は秘密でさえないとも言える。
- 4 世界が解釈されたものであることを知る者は〈世界の秘密〉への洞察の端緒に立ち、〈世界の秘密〉を意識し始める。
- 5 世界が解釈されたものであることを知る者は、世界とは、その者自身である〈わたし〉という自覚的存在の表現形態であることを知り始めている。
- 6 解釈するとは表現するということである。

6—1 身体による解釈が感覚的世界であり、思考図式による解釈が科学的世界像あるいは論理的世界観あるいは数理的世界観であるから、世界とは身体表現、あるいはまた図式的思考の表現である。

6—2 常識と称される解釈もまたその内実が世界内に立ち現れる諸事物の自己表現をわれわれが受容すると捉える考え方であるかぎり、まさにわれわれのこの考え方の表現に他ならない。

7 身体ないし思考図式という方法を用いて世界解釈するのは〈わたし〉であり、身体ないし思考図式という世界成立の条件は〈わたし〉のもとにある。それゆえ、世界とは〈わたし〉という主体の表現である。すなわち世界解釈の方法であるとともに世界成立の条件でもある〈わたし〉という主体の表現である。それゆえ、世界の実体は〈わたし〉である。

8 世界の実体である〈わたし〉はわれわれの常識の中には捉えられていないし、われわれの日常生活においては忘れ去られている。それゆえ、世界の実体ないし〈わたし〉は通常は何か別のものと取り違えられている。

8—1 この取り違えの一つが世界は解釈者とは独立の存在を持つという素朴實在論の考え方である。

8—2 もう一つの取り違えはエゴイズムである。

8—2—1 エゴイズムとは取り違えられた自己に対する執着のことである。それゆえ、エゴイストは自己への執着が徹

底したものであればあるほど、〈わたし〉を徹底して疎外することになる。エゴイストが例外なく不幸であるのは〈わたし〉に対するこの徹底的な疎外のせいである。この疎外は「死に至る病」であるが、この病を免れている者はきわめて稀である。

8—3 われわれは自分自身のことをよくわかつているつもりであるが、実は自分自身の身体でさえも、また自分自身の思考でさえもまだ十分には自分自身のものとすることができていない。身体も思考も何ものかの支配下にある。

9 世界の実体である〈わたし〉を記述することははない。あえて、ことばによる記述を試みるなら、そのことばは、〈わたしは他者（「わたしでない者」であり神である）ということば、自己矛盾をはらむことばになるであろう。このことばはウパニシャッド哲学の奥義を示すとされていることば、「汝はそれなり」とほぼ同義である。ここに、もつとも深い〈世界の秘密〉がある。このことばの指し示そうとする境地、つまり〈わたし〉、あるいは〈光〉の境域に根を張って、真理（真実、現実）、美、善、聖性が育つ。

9—1 〈わたし〉の自己認識とはただちに、世界を知ることでもある。

9—1—1 心理学の言う自己認識、わたしがわたしを心理学的に認識することは、わたしが世界を知ることではなく、せいぜい世界の一部分を知ることであるとどまる。

科学は一般に、世界の全体をその根底から洞察することと断念することに始まるのであるが、心理学もまた他の諸科学と同様にこの断念に始まる。心理学もまた思考の焦点を世界の一部分へと限定することにおいて、〈わたし〉を捉え損なってしまう。このような心理学に学ぶことによって〈わたし〉の自己認識のために得るところは何もない。

*

*

事物への洞察。―事物を志向し事物の表面で反射し自己自身へと立ち返るまなざし、これが通常の意識である。事物を意識するとともに自己を意識する意識である。この意識においてすでに反省が始まり、この反省において、わたしと事物（他者）、そしてこれら両者を内包するわたしが成立している。

完璧な反省とは、事物の核心が自己であることを洞察することである。〈わたし〉が事物の実体であり、世界の实体であることを洞察することである。このような洞察への道筋やこのような洞察そのものの解明は、哲学の歴史の中で幾度も着手されてはそのつど十分な展開を阻害されてきたが、それでもこの解明の試みは決して途絶えることはなかった。哲学の歴史、あるいはまた人類の歴史は、着手されたが十分に育てられることなく中断され放置されたこの種の思考の残骸に満ちている。

*

*

永遠の進歩。―科学もまた、永遠の進歩を約束されている。しかし科学が何らかの仮設、方法に依拠するかぎり、ここでは、想像は際限なく可能であろうが、ここに未来はないし、自由もない。また、〈わたし〉と出会うことの可能性もはじめから排除されている。このような制約のもとにあれば、永遠の進歩そのものが退屈な歩みとなるのではないだろうか。いつか、科学に生涯を捧げる者など一人いなくなる日が来るのではないだろうか。

*

*

思考の束。―事物が心象であるなら、事物は思想であり思考の束である。思考の束であるなら、思考にとつての透明性をもっているはずである。原理的には、事物の中にあつて思考にとつて不透明なものは何もない。だが、特定の思想が特定の然々の姿をとっているという事実、特定の然々の束へと思考がまとまっているという事実がある。われわれのまなざしを己に収斂させようとして事実上特定の姿をもつ思想、……この思考の束には、われわれの思考を己に奉仕させようとする何者かの意志の力が働いている。事物が特定の姿をとつて特定の位置に、つまりその事物がわたしのまなざしに対して立つその位置を占める理由は不透明である。事実性の中にあるこの不透明性は、知性が意志に使役されていることに起因する。意志の力を認識し、意志の力を解除しなければ、〈光〉の境域は開かれない。意志、欲望に使役される人間の知性は、まだ本当の〈光〉では

ない。

*

*

〈光〉の自己証明。―盲目の意志に翻弄されての放心ではなく、盲目の意志の力を解除するような放心があるとすれば、そのような放心の中にこそ〈光〉が充滿し、この〈光〉は自己自身を照明することによって、自己の存在を証明する。〈光〉はある。他のものは何もない。すべてを呑み込んだ〈光〉のみがそこにある。

歴史と社会は一般に放心を、ましてや盲目の意志の力を解除するような放心であるなら決してこれを許容しない。歴史と社会の言い分によれば、この種の放心は人間の知性を「役立たずの無駄な思考へと迷い込ませる」。知性の完全な自己表現、人間の完全な自己認識は歴史と社会からすれば、無駄で役立たずの代物なのだ。歴史と社会の自衛本能に由来する批評。……盲目の意志の力が解除されるなら、そのときは歴史と社会が幻影であったことが明らかになるだろう。……もつとも、まともな思考力をもった人間なら誰でも、社会や歴史の中でひとかどの人物であるということなど、それだけなら空疎以外の何ものでもないことをすでによく知っているのだが。

*

*

事務書類。―わたしにとって、文章を書くこと、ことばを語ることとは容易でない。〈光〉、あるいはほとんど同じことであるが真理、

真実、現実なことばの彼方にあつて、これは語ることもできないし文章にもできない。書物とか論文とか報告とか解説とかいくらかもマニュアルめいたものを備えた文章や話なら、すなわち文法、論理整合性、物語性、起承転結、等々の作法に即した文章や話なら、これらは質的には、いわば事務書類や事務的な話や挨拶と同一の水準のものであるから、いくらか努力すれば何とかわたしにも書いた話したりできるのであるが、その種のものは、わたしが心底、自ら進んで書きたいと願う文章ではないし、自ら語りたいと思う話でもない。マニュアルめいたものはすべて思考を制約するものであつて、制約された思考は決して十分に自己を表現することができないからである。たとえば、制約された思考の軌跡が、文法、論理整合性、格調、等々、いくつかの作法に適った文章においてなぞられているにしても、そこには思考の十分な自己表現は実現していない。一切のことばは物事を伝達しわからせるという意味ではたしかに世界の一部を照明するものではあるが、それ自体が〈光〉ではない。ことばへと帰着する思考はすべて盲目の意志の力の圏域からまだ自己自身を解き放つことができていない。

*

*

感覚のヴェール。―感覚がわれわれに世界を開く。われわれは身体（感覚器官）を介して感覚的世界へと開かれる。色、味、匂い、硬軟、乾湿、等の諸々の性質によって無限に多彩に彩られた豊穡な世界へと開かれる。と同時に、感覚はその世界へとわれわれを閉じ

込める、と物理学者らは言う。たとえば、視覚。彼らによれば、宇宙には長短さまざまな波長の電磁波が飛び交っているが、その中でわれわれの視覚は波長が380nm～780nmの電磁波(可視光線)に対してのみ色覚を持つことができるのであり、この範囲を越え出るより長い波長の電磁波とより短い波長の電磁波に対してはわれわれの視覚は盲目である。それゆえわれわれは実在する広大な宇宙の全貌を直視することができないようにいわば高い壁によってその実在する宇宙から隔てられていて、その壁にわずかに開いた可視光線という小さな穴を通して宇宙を覗き見しているのだ。物理学者らはこんな風に考える。見事な説明である。とはいえ、物理学者らは知っているのだろうか？ 物理学の言うところの広大な宇宙なるものが実は物理学というロゴスの穴から覗き見られた光景であるということ、しかもその穴は、われわれに備わっている感覚という穴よりもある意味はるかに小さな穴であるということ。

*

*

人種、民族、国家、言語、宗派を超えて。——いかなる人種も民族も国家も言語も宗派もいずれは消滅する。思想や宗教や芸術が〈光〉の境域に育つものであるかぎり、これらのものにとつては、いかなる人種も民族も国家も言語も宗派も、制約とはならない。これらが人種、民族、国家、言語、宗派に言及したり関わったりすることがあったとしても、そのときこれらのものは、自分自身を表現する際の背景、小道具、等々のごときものとして、それらを用いているに

すぎないのである。そのとき〈光〉の境域に立つ者が、人種、民族、国家、言語、宗派の制約下に立つ者たちの希望を、人種や民族や国家や言語や宗派の制約を超えて高まるようにと導いているのである。この導き手は、かれらの知性を自由にするのであり、決して彼らを脅かすものではない。

*

*

人間であること。——すぐれた思考の営為や徳性の高い行為やすぐれた芸術の遂行にとつては、人間であること、また人間であることが可能にするということだけのための環境を堅く守ることが大切だ。世間的、一般的な生活水準のよさなどは、創造とは無関係である。たとえば、ロシア文学(ドストエフスキーやトルストイ)のすぐれた世界性、人類性、根源性は、世間的一般的な環境のよさはまったく関係なしに成立している。

人間であることを堅持する者は、人間以上のものと人間以下のものからの音信に絶えずさらされる。彼は、絶え間なく寄せては返すインスピレーションの波に洗われる渚である。

*

*

人間への問い。——人間は地上にあつて唯一、自己自身を主題化する存在である。それゆえ、人間とは何であるかという問いはまことに人間にふさわしい問いであると言える。だが、人間が十分な自己認識に至ることは稀である。それは、歴史と社会が常に人間を抑圧

し、人間は、歴史的存在であり社会的存在であるかぎりには、おのの人間がそれである（わたし）を十分に生きることができないばかりか、この（わたし）に気付くことさえ困難にさせられているからである。

自己自身を十分に生きようとする者、そしてその生を十分に認識しようとする者、要するに人間であろうとする者、（わたし）を生きようとする者は、必ず自己自身の生を、この生につきまとうてこの生を断片化し抽象化し隠蔽する歴史性ならびに社会性の彼方へと高め深め広げようとする。この高め深め広げようとする志向の先端は、わたしが、（わたしは他者（＝わたしでない者）であり神である）ということば、この矛盾をはらむことばを用いて指し示したいと願う当のそのものに向いている。

*

*

ことばの限界。—ことばは事柄を分節化することによって意味を創出する。それゆえ言語は分節化の彼方にある事柄の意味を語り出すことができない。分節化されないものに一体どんな意味があるというのか、……というわけである。ところで、分節化されることによって意味を持ち始めることになる当のその事柄、分節化を許容するとはいえ、あるいは分別によって分節化を強いられるとはいえ、ことばがその網で捕らえようとする当のその事柄自体は、ことばの彼方にある。この事柄は、ことばの側から見れば、理解不可能な謎、秘密、あるいは無意味なもの、無きがごときもの、である。分節化

を介しての意味の創出がなされて初めて、事柄は、分別可能、理解可能となるからである。

存在を語ることはできない。存在は語りえぬものである。あるいは、存在を語ることはできるが、語られたものはや存在ではない。であるから、やはり存在を語ることはできない。こうしてわれわれは、語りうるものの内側へと自己を閉じ込めて、分別をもって秩序ある生活を送ることになるのである。この種の生活は、ことばに準拠して秩序づけられており、ここに家族の団欒があったり、諸民族の平和共存があったり、人々の間の争いがあったりする。しかし、人々がもつとも憎むもの、生活者が決して許容しないものは、この中にはない。争いの中にすら登場しない。人々がもつとも憎むものは、すでに、部屋の外へ、家の外へ、国家の外へ、ことばの外へ、「人間的なもの」の外へ疎外済みである。文化の始まりは豊穡な園からの人間の追放にあったとバイブルに記されているが、豊穡な園を自己の外へと疎外することになったと言い換えることも可能であらう。

ところで、存在は語りえぬものであるという語りもやはり、存在を語ってはいないのか？「存在と思考は同一である」というパルメニデスのことばが残されているが、このことばが正しいとして、それならわれわれはまだ一度たりとも思考したことがないのか？

*

*

われわれのまなざしを限る窓を開けること。窓を開けて外気を入

れること。外なるものへの通路を切り開くこと。魂の底を打ち破ること。こうして、〈わたし〉に出会うこと。

*

*

信頼とは何か。—信頼とは暗闇の中への跳躍のことであろうか。

そのような盲目の活動なのであるか。むしろこれは、知の原型であり、いかなる感覚も推理も計算も至りつくことのできない知そのものである愛の内に静かに歩み入ることではないだろうか。嘆きも悲しみも超えた全体者の中へと自分自身を溶解させることではないだろうか。それは、それを知らない者の目にこそ盲目的な行爲に見えるにせよ、信頼を生きる当のその人においては、この上なく自明なこと、他者への信頼において自己への信頼を回復するというこの上なく自明なことではないだろうか。信頼とは、一抹のかげりもない〈光〉そのものの別名ではないだろうか。そして、〈光〉に浸されたことの記憶を持つ者なら、そのような信頼に生きる者たちを、石か泥のようにではなく、内に美しい火を灯すランプのようなものと見做すのではないだろうか。

*

*

愛の記憶。—降り注ぐ太陽光線をさえぎってくつきりと立つひのきの木立を眺めながら、わたしたちは愛する子供たちと過ごしたこの山荘での生活の日々を思い出す。なつかしさが切実に胸に迫り、遠くどこまでも澄みきった彼方の空の下にいる彼らの存在が、すぐ

目の前にあるひのきの木蔭に見えるかのように感じられてくる。目をこらして見ればそこには何も見えないのに、見えないから錯覚だったという風に心が動かず納得せず、心は、その何も見えない木立の間の、日の降り注ぐ明るみの場所を、子供たちの存在で満たす。そこに駆け寄って声をかければ明るくはずんだ声を返してくるような気配、触れることもできるような気配。愛する者たちの不在は、こんなにも強い存在を後に残すのか。……よみがえったイエスの体に触れた弟子たち。日に日に育ち強固になってゆく不在の存在。ゆるぎない信頼、愛、信仰。

*

*

個体という在り方。—個体としてのわたしの生は、さまざまな他者存在との接触の連続である。他者存在の生も、その他者存在に与つてのさまざまな他者存在との接触の連続であると言えるし、どのような個体の生についても一般に同じことが言える。さらに言うなら、とりあえず個体と称されるものの諸部分の生についてさえも同じことが言える。一個の細胞、あるいはもつとも小さな生の単位についてさえも、同じことが言える。すなわち、それぞれの単位は、それを取り囲む周囲のものたちとの接触の連続という仕方で生活しているのである。ということは、この宇宙は、その内に無数の接触点を、極小の単位をその周囲のものたちと触れさせる接触点に至るまで無数の接触点を内包しているということである。そして接触点とは一般に、或るものがそれ自身ではない他のものと接続すること

において共有する点であり、この共有点があるからこそ或るものと他のものとの分別が可能になるのであるが、このような分別可能性の条件であるこの共有点自身は、共有点であるのだから、或るものであるとともにそのものではない他のものでもあるという性格、分別では割り切れない自己矛盾的な性格を具えているのである。それゆえ、個体の生は大きなものも微細なものもことごとく、その存在の条件として、分別では割り切れない無数の接触点を前提し、この無数の接触点から成り立っていると言える。宇宙とは無数の接触点の総体であり、小さな宇宙であるわれわれの身体もまた無数の接触点の総体なのである。われわれはこの総体、矛盾の総体を、便宜上分別を用いて、諸部分に切り分け何とか納得のゆく世界観ならびに身体観を持ち、この世界観・身体観をもつての生活のそれなりに合理的な弁明を行なうのであるが、わたしを宇宙全体の中の他の部分から切り分ける根拠はもとより、宇宙をさまざまな部分に切り分けたり、こうして個体としての身体を宇宙の極微の部分として切り分けたりする根拠もまた、右に述べたように分別にとつては理解不可能な謎であるのだから、何とか納得のゆく生活、それなりに合理的な弁明が可能な生活の中でかえってわれわれは、現実、真実、真理から目をそらしてしまうことになっているのである。

*

*

魂の容量。——たいてい二十歳にでもなればその人の魂の中には、その人に固有の色付けと味付け（屈折とも言う）を伴ってではある

が、社会がほぼすべて、歴史がほぼすべて納まっている。その魂を分析すれば、その人が生きた社会と歴史が明らかになる。これが心理学。また逆にその人が生きた社会と歴史を分析すれば、その人の魂の幾分かが明らかになる。これが社会学と歴史学。だが、この種の分析だけでは人間の魂を照明することはできない。魂には、この種の科学の視力の届かない深みがある。この深みへの気付きの欠如はその人を偏狭にする。しかし、この深みには底がない。いかなる人間も、より深い深みの意識から見れば偏狭である。